

まえがき ―うみへ―

初めて、海へ潜ったとき、海面が「もうひとつの空」のように見えました。

この空の下の青い世界は、時に荒れ狂う海面と違って穏やかで、太古からの地球の姿を、今に伝えているのだと思いました。

私にとつて、この劇的な、と言つてもいい出会いが水中世界への漠然とした憧れとなり、潜るといふ実践的な行為に惹かれ、私を気圏と水圏を隔てるこの空の下の虜にしてしまったのが、いうまでもなくスキューバ（SCUBA）だったのです。圧縮空気を詰めたタンクと、その空気を呼吸するレギュレーターを組み合わせてですが、ひとたび水に入ればタンクの重さは消え、レギュレーターは小気味のよい呼吸を与えてくれます。まるで中天に遊ぶ感覚です。

他の潜水器に比べこの軽便な潜水器は、日本の海はもちろん熱帯の海、極地の海、はたまた高山の湖へ誘ってくれました。

水中の生物や岩や砂地の造形、人間の歴史を語る遺物など、物言わぬモノ達と時間を共有できるのでした。そのひとつ一つは、空間的には点、時間的には一瞬、の体験だったに過ぎませんが、時がたつにつれ、その点と一瞬の記憶は攪拌され融合して知らず間に「内な

るうみ」とでもいうのでしょうか、そんな思いが胸の中に沈潜していきました。

冒頭の「うみへ」は、「海へ」「湖へ」です。この海と湖の向こうにある「内なるうみ」への旅もしてきたような気もするのです。ダイビングの旅、その時々で、うみ辺や島に生きる人々の生活や風習に触れたり、地質時代や考古に誘われたり、水の大循環や生物に想いをはせたり、潜水をとりまく科学技術へ傾いたり、具象抽象なるさまざま想いを巡らせるのでした。

潜る前はそうとう山に凝っていました。山の経験が、自分のダイビングに影響を与えていたと思つていました。山で、海で、大いなる自然を体験することができました。

スキューバは私を潜水指導員という職業に就かせ、多くは職業上訪れた「うみ」ですが、レギュレーターに導かれて、自分にとつて未知なる「もうひとつの空」の下の旅の中で「見て、感じて、そして想つた」六十年余りの記録と感想です。